****
隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」　第 134 号
−環境・農業・食べ物など情報の交流誌−
2004.05.20（木）発行　　山崎農業研究所＆編集同人
＜キーワード＞
環境・農業・健康・食べ物などの情報提供、高齢者と若者、農村と都市の
交流ミニコミ誌。山崎農業研究所＆『電子耕』編集同人が編集・発行。
http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_index.htm
**********発行部数　1609　部**********

□　目　次　　□----------

＜今週の提言＞「医療事故」を考える　林　尚孝
＜読者の声＞増山さんから
＜旬を食べる―野良からの便り・２＞“山椒（さんしょう）”　小泉浩郎
＜山崎農業研究所情報＞
◇５月 22 日(土)山崎農研・日仏農学会合同研究会「環境と農業を考える」開催
◇第 28 回山崎記念農業賞の宮古農林高校環境班「第６回日本水大賞」に決定
＜日本たまご事情＞
「ＢＳＥから鳥インフルエンザへ」　ＮＨＫラジオ深夜便 愛鶏園・齋藤富士雄
＜私の農的生活・12＞ブルーベリー果実の効用と多様な食べ方　石川秀勇
＜不定期エッセイ・79 歳の独り言＞戦争末期の軍隊内の悲劇　原田　勉
＜丹羽敏明の戦争体験＞34　“こぼれ話”（その１）
＜編集後記・同人の近況報告＞５月６日ー５月 19 日

＜今週の提言＞「医療事故」を考える

５月 20 日に前立腺全摘手術を受けることになった。前立腺がんは転移や浸潤さえなければ手術によって根治できるので、安心して手術台に上がろうと思う。この稿が掲載されるころは手術台の上にいることだろう。

手術前のがん転移や浸潤についての検査は、ＲＩやＣＴなど最新の機器によって行われたが、この数年の間に機器は小型化したうえに性能も向上しているようであった。骨シンチグラムを示され、骨転移についての説明を受けた。頭から足先までの自分自身の骸骨写真を見るのは気持ちの良いものではないが、骨転移のないことを自分の目で確かめほっとした。

最後に肺機能検査を受けた。ところが、いわゆる電子機器のゼロドリフトが起こり、いろいろ調整しても正常に戻らず、結局日を改めて再検査を受けた。このトラブルで、７年半前の医療事故のことを生々しく思い出した。

孫娘あゆかは痙攣重積で集中治療室に入り、心拍数、血圧などのデータを送る機器が取りつけられた。ところが、電波が飛ばない機器があり、看護師(婦)さんはその原因調べに気を取られているうちに、静脈注射セルシンによる呼吸停止が起こった。４ー５分の呼吸停止で脳機能は回復不能なダメージを受ける。入院時のＣＴ検査で健康だった肺は５時間後には肺気腫と診断され、その後脳死状態が宣告された。10 日後には結局死亡した。３歳４ヶ月であった。病院側は最後まで認めようとしなかったが、医療過誤による無酸素脳症であったことは明白であった。

今回の前立腺全摘手術では、自己血を２回に分け計 800ml を採血した。この採血のさいの細心の注意と手厚い看護に驚いた。医師１名、看護師(婦)３名が立ち会い、私の署名したラベルを目の前で採血した容器に貼り付けた。孫娘の場合は、もっと危険な静脈注射にもかかわらず、一人しか看護師はいなかった。集中治療室の朝の状態はさらに人手がなかった。一人で７名の患者に薬やら検温作業などをしていた。これでよく事故が起きないものだと思った。

医療事故がいまも絶えない。その原因は医師の能力不足などとされる場合が多い。もちろん医師の技量は医療にとってもっとも大切なことには違いない。しかし、現在の医療は、医師・看護師・技師・薬剤師など大勢のスタッフの連携の元に行われており、このうちの一箇所にでも欠陥があれば、医療事故につながる可能性は高くなる。これをどのように考えるかは病院経営の問題である。

可愛い盛りの孫娘の死を考えるたびに、十分な意思表示もできない幼児に対し、必要な人員配置をしていなかった病院の経営姿勢に憤りを覚える。医療事故の根絶には、原点に還り、医療に携わる一人一人が命のかけがえのなさを常に考え、とくに経営者はその立場の重要性を忘れないでいて欲しい。

林　尚孝
山崎農業研究所顧問、茨城大学名誉教授
y.noken@taiyo-c.co.jp

＜読者の声＞

=-

●05/14 増山博康さんより：

No133 の中川さんの投稿、興味深く読みました。
僕は自然体験や農業体験と環境教育の違いと関連性についても
整理すべきだと思います。

思うに「社会環境」と言う言葉もあるように、
「環境」は、人間の生存基盤であって、
環境問題とは、「人類の生存基盤としての自然」を
人為的に汚染・破壊していること

だと定義し、
その問題解決について考えさせるのが
環境教育であり、

自然教育や自然体験、農業体験（教育）とは
関連するが異なるものだ
と言う定義をした上で
相互の関連性を考察すべきだと考えています。

環境クラブ　増山博康
http://www.ecoclub.co.jp

P.S
イラクの事件、僕が以前中東にいった時、
「事があったら日本大使館や領事館に逃げ込むな、守ってくれないから」と
アドバイスされました。

北朝鮮の難民を中国警察に引き渡してしまった日本領事館の事件を
見ていてそれを思い出したことがあります。

ちなみに僕にアドバイスしてくれた人は、
「フランス領事館なら命がけで守ってくれる」と

言っていました。

＜旬を食べる―野良からの便り・２＞“山椒（さんしょう）”

　たけのこの季節、この頃木の芽の代表「山椒」も若葉を開く。常陸野のこの付近、農家の屋敷には、何処かに必ず１本の山椒の木がある。たけのこ、さといもの和え物に欠かせないからである。料理の最中に庭先から摘んでくる。これも新鮮がいのちである。淡いみどりと爽快な香り、真っ青な空に泳ぐ鯉のぼりとともに、初夏の訪れを実感する。

　京都を訪ねると、必ず、夜は「おばんざい」を肴に熱燗を楽しんでいる。京の路地をいくつか曲がり、白い割烹着が似合う小さな店がよい。ここでも山椒は、遠慮がちだがしっかり京の味を演出している。そのなかで自己主張しているのが「ちりめん山椒」だ。宴の最後、熱いご飯にをのせていただく。やわらかいちりめんとピリッと利いた山椒、ご飯のあまさをひときわ醸し出す。

　「ちりめん山椒」をインターネットで検索したら、「んもおーしわわせ」という中毒もどきが多いこと。自家製レシピもある。京のほんものにどこまで近づけるか、その挑戦がいまの課題だという。ところで、和え物用の山椒の葉は、すり鉢とすりこぎ棒で練られるが、そのすりこぎ棒が山椒の幹で作られることはご存知ですか。

小泉　浩郎
山崎農業研究所事務局長
y.noken@taiyo-c.co.jp

＜山崎農業研究所情報＞

◇山崎農研・日仏農学会合同研究会（第 112 回　定例研究会）

１、日　時：2004 年５月 22 日（土）13：30〜17：00
２、場　所：太陽コンサルタンツ（株）３Ｆ会議室
３、趣　旨：「地球規模での環境変動」、環境保全を重視した「先進的なフランス農政の動向」から、わが国農政への提案をいただき、わが国農業のあ

るべき姿を環境保全の視点から総合討論をする。
（司会：大山勝夫・日仏農学会・会長)。
４、話題提供者：
陽　捷行氏　農業環境技術研究所理事長「環境保全と生態系と地球環境」
是永東彦氏　東京農業大学教授（日仏農学会)「最近のフランス農業政策の動向とわが国への提言ー農業の多面的機能の支援政策を中心にー」

※日仏農学会との初の合同研究会です。会員外の方もふるってご参加ください。（会場費等 500 円）

【会場情報】
太陽コンサルタンツ（株）　東京都新宿区四谷３-５
電話 03-3357-5916　FAX 03-3257-3660

◇宮古農林高校環境班：第６回日本水大賞に決定

第 28 回山崎記念農業賞の宮古農林高校環境班は、全国 201 件の応募のなか見事グランプリに輝く。表彰式は６月３日　日本科学技術館。

※宮古農林高校環境班の山崎記念農業賞受賞については、受賞日当日に行なわれたフォーラム「農から変える“水の 21 世紀”―水環境・多面的機能・コモンズ」の内容とともに、所報「耕」98 号（2003 年秋号）に詳しく紹介されています。

所報『耕』の申し込み先（定価 1,000 円）
160-0004　東京都新宿区四谷３-５太陽コンサルタンツ内　小泉浩郎
電話 03-3357-5916　FAX 03-2257-3660
k.koizumi@tayo-co.jp

＜日本たまご事情＞「ＢＳＥから鳥インフルエンザへ」　ＮＨＫラジオ深夜便

原田勉先輩お元気でしょうか？

先輩の「メールマガジンの楽しみ方」に私どもの愛鶏園を紹介していただい

たのがきっかけとなって、ＮＨＫラジオ深夜便ディレクター角井さんの眼にとまり、５/16（日）深夜サンデートーク「ＢＳＥから鳥インフルエンザへ」で鹿児島大学の獣医学教授岡本嘉六先生と対談をしてきました。良い機会を作っていただき感謝申し上げます。

なにしろ対談相手は話すことが商売の大学の先生、こっちはなにもかも初体験の、話すことにについてはズブの素人。一時間の生放送と言われてもまるで見当がつかなかった、一応話したいことなどをメモに作って本番一時間前に渋谷の放送センターに駆けつけた。

担当アナウンサーなる者が現れて、対談は出来るだけ自然に、出来ればメモなど棒読みにせず、いつもふだん話しているようやって欲しいと無理な注文をつけられた。

鳥インフルエンザのマスコミ取材について、養鶏業界は苦い経験をしている。養鶏業界が伝えたい真意がマスコミに伝わらず、場合によっては都合の良い部分だけつまみ食いされ、伝えたいことの逆の意味になってしまうことすらあった。

生放送なれば、こちらの主張したいことがそのまま出来ると思っていた。ところがこれは大きな間違い。それは如何なる場面においても、自分の主張したいことが冷静に、相手のわかる言葉で話が出来る人のことで、ズブの素人が最初から旨くいく訳が無い。とにかく一時間後、放送が終わった時には、冷や汗と脂汗でグッタリとなってしまった。

齋藤　富士雄
（株）愛鶏園
http://www.ikn.co.jp/

＜私の農的生活・12＞ブルーベリー果実の効用と多様な食べ方

ブルーベリー果実には、眼に良い成分の含まれていることが広く知られてきていますが、同時にその他の効用にも注目していいものがあるとされます。そのことを、日本ブルーベリー協会はリーフレットで次のように述べています。

「ブルーベリーの果実成分は、ブドウ糖・果糖などの糖類、各種の有機酸などの他、ブルーベリー特有のアントシアニン色素と食物繊維が多量に含まれています。ブルーベリーのアントシアニン色素は、眼の網膜視細胞で光を伝達するロドプシン（視紅素）の再合成を促進する働きがあり、＜物が良く見える＞という視力向上の効用があります。

また、人の体内で有害な過酸化物を除去する抗酸化作用、抗炎症効果、抗腫瘍活性、整腸作用など、健康改善に有効な機能性食品として注目されています。

このような生理機能によって、ヨーロッパではブルーベリーエキスが医薬品として求められているように、ストレスの多い現代社会での健康増進にブルーベリー果実の効用は大きいものがあります。」

ブルーベリー果実の食べ方については、まずは「生食」ですが、収穫期間も限られますので、多様な加工・利用の方法が説明されています。

その一つは、果実をそのまま冷凍したり乾燥することで、輸入物でこの形のものが多く見られます。それから、生果実や冷凍果実を使っての加工品ですが、代表的なものとしてジャムがあげられます。因みに、ブルーベリージャムは、１位のイチゴジャムに迫るまでに増えてきているようです。その他の加工食品としては、フルーツソース（アイスクリームやヨーグルトなど乳製品との相性が良い)、ジュース、ワインなどの人気が高まっているようです。

最後に、料理材料としてのブルーベリーですが、料理をよくされる方により、生果等を使った焼き菓子などのレシピーが作成され、好評であるようです。

以上のようなことなのですが、自分のところでも収穫量が増えてくれば、生果実以外にどの方法で使うなり扱っていくか、重点を決めていかねばという気がしています。

【付記】昨年の 11 月から半年にわたり記してきましたが、今回をもって一区切りとさせて頂きます。なお、この続編については、後日「パート II」として起稿することがあるかもしれません。皆様には拙文へのおつきあい、有り難うございました。

石川　秀勇
山崎農業研究所会員、千葉県野田市在住
y.noken@taiyo-c.co.jp

＜不定期エッセイ・79 歳の独り言＞戦争末期の軍隊内の悲劇

　イラクにおける米軍のイラク刑務所における虐待の写真を見て思うのは、どこの国でも起こる戦争末期の悲劇であった。

　日本の敗戦の前から、日本の軍隊内でも多くの悲劇があった。敗戦の機運が強い中で、上層部の混乱が下級兵士の犯罪となって多くの犠牲者が出た。われらの身の回りの若者が理不尽な軍隊のしごきに遭い、事故や殉職という形で処理された。捕虜の虐待で戦後、戦争犯罪者の汚名を着せられ死刑になった人もいる。

　アメリカはベトナム戦争の時も、虐殺・拷問など多くの犯罪を起こし、アメリカ兵士も薬物使用・自殺・逃亡などに苦しんだ。すでに経験済みのことを繰り返している。イラク戦争は早く止めるべきだ。

　日本の自衛隊も巻き込まれないよう、早く引き揚げるべきだと思う。

山崎農業研究所会員、電子耕編集同人
原田　勉
tom@nazuna.com
http://nazuna.com/tom/

＜丹羽敏明の戦争体験＞34　“こぼれ話”（その１）

　私の戦争体験記は前回で終わりますが、書き残したことや書き忘れたことがあることに気がつきました。それらを思い出すままに〈こぼれ話〉として追補します。

　○デング熱＝初めてデング熱に罹ったのはジャカルタの兵站司令部でだった。転属先の「襲部隊」がセレペス島（現在のスラウェシ島）に駐屯しているということで、セレベスに渡るためここジャカルタの兵站で待機していたとき、デング熱にやられた。激しい悪寒を覚える。40 度の高熱が出て、戦友の毛布３ー４枚をかけその上から戦友がのしかかって私の体を押さえつけても、体の震え

がおさまらない。衛生兵がきて「これはデング熱だから４ー５日もすればおさまるよ」と言って、解熱剤を投与してくれた。間もなく震えはおさまったが、依然熱は高いままだ。マラリアとデング熱とどう違うのか、よく判らないが、マラリアは罹ると、三日熱とか四日熱と言って発熱を繰り返す。症状はデング熱も同じらしい。高熱のため食欲はない。熱はいくらか下がってもっぱら眠り続けた。しかし熱は断続的に高くなり、呼吸が苦しい。そんな状態が１週間ほど続いてようやく平常に復した。その後間もなく出動命令が出てセレベスへ出発することとなった。私は病後ということもあって隊列の後尾に廻された。そのお陰で隊列の後ろの方は出発が後回しとなり、結局、出発は延期、再び待機しているうちに第４航空軍に転属替えとなり、シンガポールへ逆戻りすることになった。先発した連中はセレペスに渡る海峡で敵潜水艦の攻撃に会い、全員戦死したと聞いた。私はデング熱のお陰で命拾いした。

２回目にデング熱に罹ったのは終戦後。シンガポールへ移動中のジャングルの中でだった。テントを張った中にアンペラを敷いた床の上で毛布にくるまりながら、熱発（軍隊ではネッパツと言う）に呻吟しながら一人で病魔と戦っていた。昼間は皆使役のため出掛けるので私が留守番をすることになる。枕元に水の入った飯盒が置いてあり、手拭いで頭を冷やすのだが、水を取り替えることは出来ない。今度は衛生兵はいないので薬の投与はない。携行しているキニーネ（マラリアの特効薬。内地を出るとき 20 錠ほど入った小瓶を配給された）を呑んで対応した。夕方皆が帰隊して飯盒の水を替えてくれる。「ゆっくり休め」と言って、何かと世話をやいてくれるのがどうにも申し訳なくて、「済まん、済まん」と連発していた。食欲もなく独りで寝ていると「このまま死ねたら楽でいいな」と思う。死んだ方がましだと何度も思った。それを察した戦友が「一緒に日本へ帰るまで頑張れよ。馬鹿なこと考えるんじゃないぞ」と励ましてくれる。しかし独りになると生きる気力がなくなる。「これが死に神に取りつかれるというんだろうな」と思ったりする。幸いマラリアではなかった。かれこれ１週間もするうち熱が下がりだんだん食欲も出てくると、「日本へ帰りたい」意欲が湧いて来た。

＜編集後記・同人の近況報告＞（５月６日ー５月 19 日）

山崎農業研究所の会員でもあった、農林業ジャーナリスト・故増井和夫氏（元全国農業新聞）の遺された記事・論考のとりまとめに追われている。６月中には１冊の書籍としてまとめられる予定だ。

「農林業ジャーナリスト」と称する人は増井さんだけだと言う。そこには「農業と林業の一体的、複合的な生産システムこそが地球環境に負荷を与えず、資源循環・環境保全型の新しい農林業の一つの方向である」（元共同通信社・古野雅美氏による紹介文から）という信念が込められていた。

本書のテーマは「土地利用型畜産」。増井さんは以前から、輸入飼料依存型の日本畜産のあり方について警鐘を鳴らしてきた。本書の核になる「土地利用型畜産再生へのシナリオ」は『農政調査時報』に 11 回にわたり連載されたが、連載終了（2001 年７月号）直後に日本でＢＳＥ感染牛第一号が発見された（2001 年９月）のはなんとも皮肉である。増井さんはニュースを見ながら「だから俺は言ってきたではないか！」と憤っていたという。

生きておられれば、この「電子耕」にも積極的に投稿していただいていたと思う。それがかなわないのが寂しい。（山崎農業研究所・田口　均）

◎お願い「＜読者の声＞の投稿規定・メールの書き方」

１、件名（見出し）を必ず書いて下さい。「はじめまして」は省略して、言いたいことを具体的に。
２、氏名・ハンドルネームは、文末ではなく始めのほうに。
３、１回１テーマ、10 行位に。
４、ホームページを持っている人は、文末に URL を。
５、JIS X0208 規格外の文字（機種依存文字）のチェックを。
http://www.chem.sci.osaka-u.ac.jp/networks/check/jisx0208.html
インターネットで使えない丸数字や半角カタカナ、括弧入り略号などは文字化けの原因です。

◎投稿アドレス変更のお知らせ

電子耕への投稿アドレスは、発行人の変更に伴い、
y.noken@taiyo-c.co.jp
となっております。投稿される方はこちらのアドレスにお願いします。

次回　135 号の締め切りは５月 31 日、発行は６月３日の予定です。

最後まで読んで頂き有り難うございました。今後もよろしくお願い致します。

★『メールマガジンの楽しみ方』発売中

書名：岩波アクティブ新書 45『メールマガジンの楽しみ方』
著者：原田　勉　定価：735 円　発行日：2002 年 10 月 4 日
発行所：岩波書店　ISBN4-00-700045-X
まえがき・目次・著者紹介・注文方法はこちら
http://nazuna.com/tom/book.html

『電子耕』から大切なお知らせ
http://nazuna.com/tom/denshico.html
http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_mailmag.html
＜本誌記事の無断転載を禁じます＞

****
隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」　第 134 号
バックナンバー・購読申し込み／解除案内
http://nazuna.com/tom/denshico.html
http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_mailmag2.html
2004.05.20（木）発行　　山崎農業研究所＆編集同人
mailto:y.noken@taiyo-c.co.jp
**********ここまで『電子耕』**********